

夏目漱石『いっころ』

——百年の謎を解く（二）——

藤 井 淳

序 章

§ 『歎異抄』の再発見

『善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。』

これはいうまでもなく『歎異抄』の最も有名な一節である。煩惱に沈み、さらにその煩惱に沈み切れない自己の姿をあくまで深く見つめた親鸞（一一七三―一二六二）の言葉を記した『歎異抄』ほど近代を通じて広く人々に共感を持つて読まれた仏典はない。しかしこの『歎異抄』が重要な価値を持つものとして我々の前に現れたのは、親鸞から現代に至るまでの七百年間のうちで、それほど古いことではない。『歎異抄』は室町時代に出た浄土真宗の中興の祖、蓮如（二四一五―一四九九）によって「当流大事聖教」として認められながらも、同時に「無宿善機」には見せてはならない禁書とされ、主に学僧の間にだけ読むことが許されていたのである。そのために近代に入ってから蓮如は愚民観を持ち、親鸞の真意を歪めた人物としての烙印を押されることになった。

その一方、『歎異抄』を近代に入ってその価値を再発見をし、ほぼ現在の我々に知られる形で開放したのが真宗大谷派の僧侶、清沢満之（一八六三―一九〇三）である。清沢満之は明治十年の設立から十年も経たない東京大学で西洋哲学を学び、その明晰な頭脳をもって、近代日本において初めて西洋哲学と仏教との問題を正面から取り上げた。そしてその後半生をおよそ近代とは正反対の性質を持つ仏教教団の近代化改革に捧げる。清沢は結核や宗門改革の挫折などに苦しめられつつ、『阿含経』『エピ

クテタス語録』と共に『歎異抄』を「予が三部経」と呼び、それらを糧として内省を深めて行く。生涯にわたって「煩悶憂苦」に苦しめられた清沢は『歎異抄』によって、初めて近代的信仰を獲得する。そして清沢の死後、後継者たちによる努力を経て『歎異抄』は広く世に知られることになる。

§ 忘れられた思想家——清沢満之

以上に述べたように『歎異抄』は清沢満之を媒介として初めて我々の知る形で開放されたのである。しかし『歎異抄』は一般的にもよく知られる事柄に属するにしても、清沢満之という人物は我々の多くにとつてなじみのあるものではない。たとえその名前を知っていても、何をしたのか、どんな人物であったのかを詳しく知るものはさらに少なくなるだろう。例えば清沢満之の知名度はどの程度かと言えば、『日本の名著』全五十巻（中央公論社）の中で清沢満之が鈴木大拙と共に一卷をなすという構想が公表された時に「一般読者からの反応には、清沢満之なる名前が日本を代表する五十数名のなかにまぎれこんでいることへの疑問と不満の表明がもつとも多かった」というぐらい惨憺たるものがある。清沢満之は現代において完全に「忘れられた思想家」となっているといえる。清沢の思想には現在から見ても、浅薄な面があることは確かに否定できない。その浅薄な面が清沢を「忘れられた思想家」にしている最も大きな原因でもある。しかし現代に生きる我々は清沢の思想の浅さを嘲笑できるほど「本当の新しい人」になっているのだろうか。我々はもはや清沢の失敗を繰り返してはいないのだろうか。我々は今また「清沢の歩いた路を、清沢と同じように辿っている」のではないのだろうか。

§ 不朽の近代人——夏目漱石

この清沢満之とはほぼ同時代に生きたのが夏目漱石（一八六七—一九一六）である。漱石についてはいまさら詳しく解説する必要もないだろう。清沢の六年後に東京大学を卒業した漱石はイギリス留学後、英文学者として明治学問界での保証された地位を選ばず、かえって近代日本で最も有名な小説家としてその名を残すことになる。そして漱石の文学作品は現在も多くの人々に読まれ、親しまれている。一方、漱石と同じ「明治」という時代を生きた清沢満之は現代においてはその名前さえほとんど忘れられていることは既に述べた。しかし清沢満之も、文学と仏教という立場の違いはあれ、近代日本の抱える課題に「真面目

に立ち向かった人物であつた。この二人の近代人が辿つたその後の「運命」を決定的に分けたものは何であつたのか。本論では漱石文学『こゝろ』を素材にして彼らの辿つた路を振り返つてみる。

§『こゝろ』に現れた清沢満之

本論の内容について簡単に述べることにする。本論の目的は夏目漱石が小説『こゝろ』の登場人物Kのモデルとして清沢満之を想定していたことを論証することにある。『こゝろ』「先生と遺書」に描かれた「K」と「先生」という二人の青年が「真面目」に道を求める姿とその挫折は現代でも多くの人々の心を打つ。Kと先生は明治を精一杯に生き、明治に死んだが、彼ら二人の姿は清沢満之と夏目漱石という「明治の精神」を具現した二人の近代人の姿と奇妙にも多くの点で符合するのである。『こゝろ』についての論文全てを振り返ることが不可能なほど、今まで『こゝろ』は多く論じられているが、『こゝろ』におけるKと清沢満之との深い関係はこれまでほとんど問題とされたことはなかったようである。本論は漱石の視点から見た清沢満之の姿を中心に述べて行く。

§ 漱石の遺言

まもなく清沢の死から百年がたち、漱石がその空虚さを危惧した「二〇世紀の文明」が終わろうとしている。そのような現在こそ、清沢満之と夏目漱石という二人の近代人が立ち向かった課題とは何であつたのかをもう一度振り返ることは決して無駄なことではないはずである。我々が清沢満之と夏目漱石という明治を「真面目」に生き抜いた二人の「人生そのものから生きた教訓を得」ることを漱石は望んでいると私には思われる。次の文は今もつて漱石から我々に投げかけられた遺言であると言えよう。

『私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上げます。しかし恐れては不可せん。暗いものを凝と見詰めて、その中から貴方の参考になるものを御攫みなさい。／私は今自分で自分の心臓を破つて、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿ることが出来るなら満足です。(2)』

凡例

一…本論で用いる漱石関係の資料の引用は『漱石全集』（全十八巻、岩波書店）による。近年新しい改訂版が同じく岩波書店から出されたが（これを本論では『新漱石全集』と呼ぶ）、本論では現在、なお多くの人々に親しまれている『漱石全集』を用いることにした。なお『いころ』は上「先生と私」、中「両親と私」、下「先生と遺書」という三部構成になっている。このうち、本論で引用するのは主に下「先生と遺書」の箇所からであり、「(41)」、「(53)」などと数字だけが示されるのは「先生と遺書」からの引用である。その他の引用は「(上14)」などとする。

二…本論で用いる清沢満之関係の資料の引用は主に『清沢満之全集』（全八巻、昭和二十八―三十一年、法蔵館）による。しかし清沢の『精神主義』関係の論文および『我が信念』は『清沢文集』（一九二八年、岩波文庫）から引用する。現在入手がより容易で、内容的に整理されていることによる。また参考として近年出版された『清沢満之全集』（二〇〇二年―二〇〇三年、岩波書店）および『清沢満之集』（二〇一二年、岩波文庫）を挙げる。

三…本論第三章第三節「明治の異端」に限ってしばしば旧字体を使用する。例えば「哲学」を「哲學」と標記した。これは当時の「哲學」と、現在我々が使う意味での「哲学」の用法に大きな隔たりがあるからであり、そのことに注意を喚起するための便宜的なものである。『哲學雜誌』などの旧字体の使用も同じ理由による。

四…本論では多くの場合『哲學會雜誌』（初号―六十三号）の名称を『哲學雜誌』（六十四号―）として統一している。後者は前者の後継雑誌であり、号数も統一しているなど両者は基本的に同質のものであることによる。

五…現在の東京大学は草創期にはその名称を東京大学（一八七七―）↓帝国大学（一八八六―）↓東京帝国大学（一八九七―一九四六）と目まぐるしく変えている。本論の話題はその全ての期間にわたっているが、煩を避けるため全て「東京大学」の名称で統一する。（一部例外）

六…本論で清沢満之が中心となつて展開した思想運動、「精神主義」については、現在の一般に使われる用法と大きくことなるため、「精神主義」として記載し、その違いを喚起する。

七…本論で「傍点」と呼ぶ箇所は「、」にあたり、全て引用者による。また引用文中の（ ）も特に断らない限り全て引用者が補った箇所である。

八…本論で時々引用する「哲学会史料」は『哲學雜誌』三〇〇号所載の伊藤吉之助の手になる「哲学会史料（上）」である。

第一章 『こゝろ』構想期

—真宗大学の学校騒動をめぐって

本章で取り上げる資料は講演『模倣と独立』（第一節）、漱石書簡八三二～八三四（第二節）、漱石所蔵『清沢先生信仰座談』（第三節）である。これらはいずれも『漱石全集』に所載されているものであり、漱石について我々が最も直接的に知り得る資料である。ここではこれらの資料を用いて、漱石が清沢満之と深い関連のある真宗大学の学校騒動事件から、乃木大将の殉死とは別の、もう一つの「明治の終わり」を感じ、それを『こゝろ』を描く際の構想に用いたということを示す。

第一節 講演『模倣と独立』

§ 一 講演の時期—『こゝろ』との関係

『模倣と独立』は漱石が大正二年十二月に第一高等学校で行った講演である。漱石は大正二年十一月に『行人』の連載を終え、大正三年四月から『こゝろ』を連載する。漱石が講演『模倣と独立』を行った時期は『行人』と『こゝろ』との連載のちょうど中間に当たり、つまりは小説家である漱石が次に連載するべき『こゝろ』を構想していた時期にあたる。だから『模倣と独立』に『こゝろ』に出てくる話題がかいまみえるのは当然とも言える。実際『漱石全集』の索引には『こゝろ』と『模倣と独立』との関係が指摘されている。その中で特に注目されるのは先生の自殺に影響を与えた、乃木大将の殉死について述べられた箇所である。それについては後で述べるが、ともかくこの講演『模倣と独立』は時期的に考えて『こゝろ』の構想を示すものとして最も重要な資料の一つである。

§ 二 『模倣と独立』—内容の概観

『模倣と独立』の論旨、つまり漱石が何を言いたかったのかは一読しただけでははっきりしない。そのことは『漱石全集』を

編集した小宮豊隆がこの講演の底本を校訂するときに「それほど立派な講演でもなかったという自覚が漱石にあった」と推測して述べていることからもうかがわれる。

講演の内容を順番にあげていくと、漱石は自身の高校時代の思い出を枕として述べ、次に講演の直前に見た文展・外国帰りの画家の展覧会についての感想を述べる。それらは「模倣」についての例である。次には、漱石が肯定的に評価する「独立(インデペンデント)」の例として親鸞上人やイブセンを挙げる。そのインデペンデントを述べる中で漱石自身による「成功」の定義が行われる。その定義の中に後で詳しく述べる「学校騒動」と「乃木大将の殉死事件」が並列して挙げられている。最後に漱石は、人間にはイミテーションとインデペンデントの両方が必要だが、今は後者が重要だということを結論して講演を終えている。

『模倣と独立』の内容を詳細に検討すると、意外に漱石の言いたいことは単純であり、そろそろ日本も西洋の真似ばかりしていないで、「本式のインデペンデント」になるべきだという漱石の後半生に一貫していた主張が導き出せる。しかし実際には例の挙げ方が唐突であり適切と言えず、全体の論旨が混乱しているような印象を与える。またこの分かりづらさの大きな原因は、後に詳しく解説するように、漱石が具体例を挙げると自ら言っておきながら、抽象的に述べる箇所があることにある。

§三 乃木大将の殉死と学校騒動

『模倣と独立』の乃木大将の殉死についての箇所が「いころ」との関係で指摘されているのを前に見た。この箇所はいままで単独で注目を浴び、一人歩きしている観があるが、乃木大将の殉死に先立って直前に述べられている学校騒動についての注目された例は見当たらない。しかしながら、次に見るようにこの「学校騒動」と「乃木大将の殉死」との関連は非常に密接である。A・B及び①②などの番号は私がつけた。

- A ①成功と云ふことに就いて歴史などの例を挙げたが、誤解されるといけないから茲に手近い例をもう一つ挙げて置きたい。②学校騒動があつて其学校の校長さんが代る。③此学校ではありませんよ。④さうすると後に新しい校長さんが来ませう。さうしてその学校騒動を鎮めに掛る。其時は色々思案もやりませう計画も要りませう。刷新も色々ありませう。⑤さうして旨く往けばあの人は成功したと云はれる。成功したと云ふと、其人の遺口が刷新でもなく、改革でもなく、

整理でもなくとも、その結果が宜いと、唯その結果だけを見て、あの人は成功した、成程あの人は偉いと云ふことになる。⑥ところが騒動が益大きくなる。⑦さうすると今迄遣つた其人の一切の事が非難せられる。同じ事を同じやうに遣つても、結果に行つて好ければ成功だと云ふが、同じ事をしても結果に行つて悪いと、直ぐにあの人の遣口は悪いと云ふ。その遣方の実際を見ないで、結果ばかりを見て云ふのである。その遣方の善し悪しなどは見ないで、唯結果ばかり見て批評をする。⑧夫であの人は成功したとか失敗したとか云ふけれども、私の成功と云ふのはさう云ふ単純な意味ではない。⑨仮令その結果は失敗に終つても、⑩その遣ることが善いことを行ひ、夫が同情に値ひし、敬服に値ひする觀念を起させれば、夫は成功である。さう云ふ意味の成功を私は成功と云ひたい。十字架の上に磔にされても成功である。かう云ふのは余り宜い成功ではないかも知れぬが、成功には相違ない。是はテンポラルな意味で宗教的の意味ではない。乃木さんが死にましたらう。あの乃木さんの死と云ふものは至誠より出たものである。けれども一部には悪い結果が出た。夫を真似して死ぬ奴が大変出た。乃木さんの死んだ精神などは分らんで、唯形式の死だけを真似する人が多いと思ふ。さう云ふ奴が出たのは仮に悪いとしても、乃木さんは決して不成功ではない。結果には多少悪いところがあつても、乃木さんの行為の至誠であると云ふことはあなた方を感動せしめる。夫が私には成功だと認められる。さう云ふ意味の成功である。だからインデペンデントになるのは宜いけれども、夫には深い背景を持つたインデペンデントとならなければ成功は出来ない。成功と云ふ意味はさう言ふ意味で云つて居る。

AとBは私が区分したもので一段落中に連続している文である。AとBを併せて一段落全体を構成している。この箇所の内容をざつと見るだけでは、やはり論旨がはつきりしておらず分かりづらい。しかしながら、冒頭のA①で「成功と云ふことに就いて歴史などの例を挙げたが、誤解されるといけないから茲に手近い例をもう一つ挙げて置きたい。」と述べ、「成功」についての具体例を挙げるとしており、また傍点をつけたようにこの箇所「成功」「失敗」「不成功」という語が頻出することからも漱石はこの段落でAとBを「成功」というキーワードを用いて並列して考えているのが分かる。

次にAとBそれぞれについて考えてみると、「乃木大将の殉死」を扱ったBの箇所は当然のことながら『こゝろ』における先生の自殺と密接に関連している。『漱石全集』の索引で『こゝろ』の素材としてあげられているのもBの箇所である。このことは論ぜられることが多いので、本論では述べない。一方、Aの箇所は『漱石全集』には注がなく、『新漱石全集』の注には「こ

こもわかりにくい」と述べられている。

この分かりにくさの理由を解説すれば、漱石は①で「成功」の具体的な例としてこの学校騒動を挙げるとしていながらも、その後②～⑦で非常に抽象的に述べている。さらにこの騒動の結論は漱石自身は⑨で「失敗に終わつ」たと考えているが、他人にはこの学校騒動の話がどこで終わったのか理解することはほとんど不可能である。さらに抽象的に述べたこの学校騒動を世間的には「失敗」としながらも、⑩でより高次的な意味(夫が同情に値ひし、敬服に値ひする観念を起させれば)では「成功」とする両義的評価もこの箇所をますます理解しがたいものにしていく。この講演全体の論旨が分かりづらいことは既に内容の概観のところでも述べたが、中でもAの箇所は抽象的すぎて分かりづらい。多くの人は読み飛ばす程度の箇所である。しかしながら、この箇所を細かく区切って見ていけば清沢満之という人物と関係した真宗大学の学校騒動と多くの点で一致しているのに気づく。

以下、しばらくAの箇所を番号を振った順で詳しく見て行く。

①「成功」の「手近い例」を挙げるとして、A・Bを含む一段落が始まる。

②学校騒動の発生と校長の交代

③この講演は第一高等学校で行われたものであるから、この学校騒動が第一高等学校の事件ではない事が分かる。また、この否定の仕方から漱石がこの学校騒動をどこかの実在の事件として想定しているようである。

④新しい校長の着任とその校長による騒動の収拾

⑤新しい校長についての当時の世論の批評

⑥騒動の拡大

⑦新校長への当時の世論の非難

⑧漱石自身による「成功」の意味の定義

⑨仮定の表現を使っているが、既にその事件は終わり、世間的には「失敗」したと漱石は考えていた事が分かる。

⑩漱石自身による事件の最終的評価。その事件についての成功と失敗という両義的な判断をもちつつも、⑨を踏まえつつ高次の意味でその事件の結果を「成功」と考えているのがわかる。

ここで以上の十項目は内容の点で次の四つに分けられる。

a…学校騒動の實在を裏付ける箇所

①③⑨から漱石は實在の学校騒動のことを述べていると推測できる。

β…学校騒動の経過

②④⑥は騒動の経過を述べている。この騒動についてのこれほど詳しい顛末を漱石がこの講演でわざわざ仮構するほどの必要性はなく、②↓⑥については非常に自然な流れであることから、aと併せて、さらに漱石がこの箇所で實在の学校騒動を想定して述べているとみなすことができる。すぐ後でこの箇所を詳しく見る。

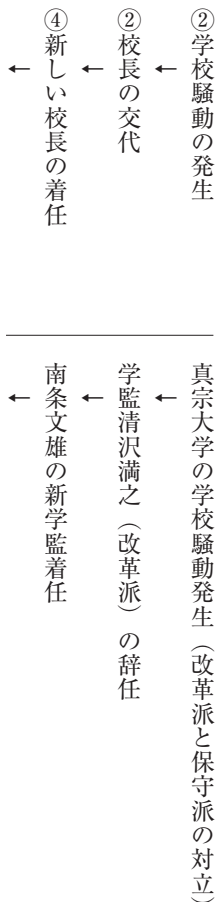
γ…世論の評価

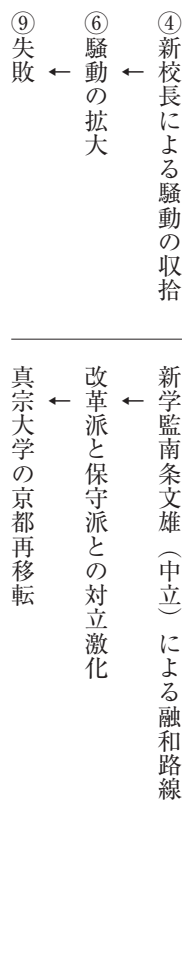
⑤⑦で漱石が指しているのは漱石自身が見聞したことに基づいて述べた『當時の世論』であるが、それに対しては⑤「唯その結果だけを見て」⑦「唯結果ばかりを見て」として批判的に述べている。

δ…漱石の評価

⑧⑨⑩は漱石自身の学校騒動に対する最終的な評価であり重要な意味をもつ。この箇所は第三章第三節「明治の異端」で再び取り上げる。しかし今は学校騒動の経過を問題にしているのでここでは扱わない。

Aを以上のように内容の点で四つにまとめた。ここで学校騒動の経過について漱石が述べているのはβの②④⑥である。またδの⑨から学校騒動は世間的には「失敗」したと漱石が考えたことと併せてその推移を整理して見ると左図の上側のようになる。





そして下側に挙げたのは実際に起きた真宗大学の学校騒動の推移である。上下で完全な対応関係をなしているのが分かる。真宗大学の学校騒動の原因や経過は清沢満之の人生・性格と密接に関わっているので、詳しい経過については第二章「清沢満之の生涯」の中で述べる。漱石は真宗大学の学校騒動の結末を清沢の全生涯の象徴として見たと考えられるが、本節ではともかく漱石が『こゝろ』を執筆する直前に行った講演『模倣と独立』で、乃木大将の殉死事件(B)の直前に述べられた学校騒動(A)の経過が清沢満之と関係する真宗大学の学校騒動と一致していることを示唆するに止める。

第二節 真宗大学への教員周旋の漱石の手紙

第一節では漱石が講演『模倣と独立』の中で述べた学校騒動と実際に起きた真宗大学の学校騒動の推移とが一致しているのを見た。しかしそれだけでは単なる偶然の可能性もある。次には漱石自身が真宗大学の学校騒動についてどの程度知っていたのか問題となる。

それについては漱石はこの真宗大学の学校騒動そのものだけではなく、騒動の背後にある、清沢満之の流れを汲む「改革派」と、清沢らと敵対する「保守派」との対立の構図についてまで正しく認識していたことが漱石書簡八三二―八三四から導き出せる。以下それを解説しながら見て行く。

漱石は明治四十年に教えずで英文学を専攻する大谷正信から真宗大学の教員の周旋を頼まれた。真宗大学の教員であつた大

谷は、専門が同じこともあり漱石とは頻繁に交際をしていたようである。次の手紙は真宗大学の教員周旋に関する三通の漱石書簡の最初（八三二）に当たる。漱石は大谷に三人の教員候補を推薦している。

『書簡番号』八三二』

九月十日 火 午後六時―七時 本郷区駒込西片町十番地ろノ七号より

本郷区駒込曙町十一番地 大谷正信へ

先刻は御多用の所御邪魔失礼致候。御親切に御案内被下候段難有奉謝候。諸真宗大学さきの口は喜んで応ずる人は沢山可有之と存候が早速思ひつき候人を二三御紹介及候。古きかた御望の由につき

一 戸川明三。是は明治学院出にて英文撰料卒業。山口高等学校教授廃校後出京。御存じの秋骨君に候

二 名須川良。是は熊本高等学校教授たりし所衝突の結果出京

三 野間真綱 是は前の二人と違ひ門弟に候。四年許前に卒業。只今明治学院の教師。先達士官学校をやめたり
其他御望とあれば猶二三人はあるべし。新しくて済めばいくらでも有之候

先方へ問ひ合す前に一寸御意向を伺ひ置候。先は右御返事迄 勿々頓首

九月十日

大谷 様

金 之 助

上の手紙は大谷から真宗大学の教員の周旋を頼まれた後に出した漱石の返事である。「真宗大学の口は喜んで応ずる人は澤山可有之と存候」と述べているが、社交上の修辞でもあり、ここからは直接に漱石が真宗大学を高く評価していたとは言えない。しかし就職の世話をする以上、責任が自分に生じることが漱石も承知していたはずであり、その点では真宗大学に一定の信頼を持っていたといえる。

この手紙の後、大谷が漱石に返事をよこしたのか、漱石を直接訪れたのかは定かでないが、漱石が四日後に次の手紙を出すまでに、以下のようなやり取りがあったと推定される。以下の推定はほぼ確実なものである。

大谷はこの内、漱石から教員候補の一番目として挙げられた戸川秋骨の就職を希望した。一方で戸川はキリスト教信者ではないかとの噂があった。当時は一般社会ではキリスト教に対する偏見が大きかった時代である。しかも真宗大学は仏教系の大学であり、もし戸川がキリスト教信者であれば何らかの摩擦が生じることが予想される。そこで大谷は漱石に戸川のキリスト教に対する信仰の有無を問い合わせた。それに対する大谷への返事が次の漱石書簡八三三である。

『書簡番号』八三三』

九月十四日 土 午前九時—十時 本郷区駒込西片町十番地ろノ七号より

本郷区駒込曙町十一番地 大谷正信へ

拝啓 戸川君の信仰事件は小生も知りませんが一つきいて見ませう。きいて耶蘇信者だと云つたら仕方がないが。信者だらう丈でやめるのは少々残念ですから。(後略)

九月十四日

夏目金之助

鏡 石 兄

漱石は大谷からの問い合わせを受けて、戸川にキリスト教の信仰の有無を聞いてみると返事している。漱石がキリスト教に偏見を持っていたという記録はない。多少好奇心を持って見ていたという程度であったと思われる。また真宗大学を東京に移転して近代的教育を行おうとした清沢満之は当時の仏教側の人物にしては珍しく、しばしばキリストを宗教者として肯定的に見ている。それではなぜ、清沢の系統に属すると思われる大谷正信はそれほど神経質に戸川の信仰問題を気にするのか。そこ

には当時の真宗大学の底辺に渦巻く保守派と改革派の対立があったのである。

次に挙げるのは上の大谷への手紙と同時に出した、漱石から戸川への手紙である。便宜上、前半と後半とに分ける。

『書簡番号』 八三四』

九月十四日 土 午前九時—十時 本郷区駒込西片町十番地ろノ七号より

府下大久保仲百人町百五十三番地 戸川明三へ

(前半) 拝啓 先日はわざわざ御光来被下しました処何の風情もなくまことに失礼致しました。偕大谷君から直接に御照会になつたさうですが例の真宗大学授業の件ですが実は小生も大兄を推挙して置いた処、昨日大谷君から手紙で当局者のいふには戸川君は耶蘇教ぢやないだらうか、さうすると京都の頑固連に対して困るといふ返事ださうです。そこで大谷君があなたの信仰の有無を私へ聞き合せに來たのですが私はそんな事は一切知らないから—まあ戸川君に聞いて見るから待つてくれと大谷君に今手紙をかけた所です。

(後半) それで大兄があまり御望にならんものを信仰の有無など問ひ正す様なホジクリは不必要と認めますが萬一目下の御事情該校出稼御希望なればだまつて其儘に置いては却つて御不便宜かと存じ入らぬ事ながら一寸伺ひます。尤も直接に大谷さんの方へ御返事をなさつてもよろしう御座います。先は用事まで 勿々

九月十四日

金 之 助

秋 骨 様

漱石はこの手紙の後半で戸川に「信仰の有無など問ひ正す様なホジクリは不必要と認めます」と言いながらも、やはり戸川の生計に関することであり一応大谷からの問い合わせを取り次ぐと言っている。

この手紙の前半からは真宗大学に関わる興味深いことがうかがわれる。ここで漱石がいう「当局者」とは清沢の流れを汲む

改革派のことを指し、「京都の頑固連」とは清沢らと対立する保守派のことを指している。『模倣と独立』で述べられた学校騒動の経過は第一節で見たが、これらの手紙を漱石が書いた時期はそのうちの⑥「騒動の拡大」期に当たるとする。

それに対応する真宗大学の学校騒動は「改革派と保守派との対立激化」である。改革派はキリスト教にも理解を示した清沢満之の流れを汲むだけに、改革派にとっては真宗大学の教員にキリスト教信者を採用するのに何の不都合もなかったはずである。しかし改革派(当局者)はキリスト教信者を真宗大学の教員として採用することで、保守派(京都の頑固連)から非難されないように細心の注意を払っている。保守派は改革派の些細な欠点でも見つけて、足元をすくおうとしていたのであり、漱石は両派が真宗大学の運営を巡って緊張関係にあることを知っていたのである。両派の対立については第二章で詳しく見るが、学校騒動の結末は京都再移転という保守派(京都の頑固連)による勝利、改革派(当局者)の敗北で決着したのである。

漱石書簡八三四からは、漱石は真宗大学の一連の学校騒動についてその表面的事象のみならず、その背景にある対立の構図まで正しく認識していたことが示された。清沢満之が真宗大学を東京に移転したのは明治三十四年である。また漱石がこれらの手紙を出したのは明治四十年である。漱石が六年前に出来たばかりの真宗大学の事情について全く知らずに他人の就職の世話をすることはあり得ない。つまり漱石は真宗大学の京都再移転は明治四十四年十一月と「明治の終わり」の時期に位置していたのである。

そしてその学校騒動の結末である真宗大学の京都再移転は明治四十四年十一月と「明治の終わり」の時期に位置していたのである。漱石は真宗大学の学校騒動の結末に明治を「余りに正直」に「余りに単純」に(42)生き抜いた清沢満之の遺志の破綻を見たと考えられる。

第三節 『清沢先生信仰座談』

最後に『こころ』構想期に漱石が清沢満之について関心を抱いていたという直接の証拠となるのは漱石山房蔵書目録に載せられている『清沢先生信仰座談』(明治四十三年、無我山房、以下任意に『座談』と略する)である。『こころ』本文とこの本の内容との関連の検討は第三章第二節の注の箇所で行う。今ここでは『座談』と真宗大学の学校騒動との関連について述べる。漱石はこの本を通じて乃木大将の殉死とは別の、もう一つの「明治の終わり」を感じ、『こころ』を書くための直接の動機を得たと思われる。

§ 一 『座談』の概要

『座談』は清沢満之の門弟である安藤州一が師にあたる清沢満之（明治三十六年、四十一歳で没）の言行を清沢の死後すぐにまとめたものである。初版の『座談』は明治三十七年に刊行された。安藤が清沢に従ったのは清沢の晩年のことであり、したがって『座談』には清沢の晩年の様子が中心に描かれている。具体的には清沢が晩年に唱えた思想運動「精神主義」、清沢の真宗大学への期待、結核に苦しみつつ近代的信仰を獲得した清沢の姿について述べられている。

§ 二 『座談』を読んだ年代推定

漱石が初版の『座談』（明治三十七年刊）ではなく『こゝろ』構想期に『座談』（明治四十三年刊）を購入していることからだけでも、漱石が清沢満之をKのモデルとして想定していたという推測が成り立つが、ここでは一歩踏み込んで仮に漱石が『座談』を読んだとして、その読んだ時期を推定してみる。

漱石の所蔵する『座談』の刊行年は明治四十三年である。従って最も広い可能性として、漱石が『座談』を読んだ時期の上限を明治四十三年（一九一〇）年、下限を漱石が亡くなる大正五（一九一六）年とすることができる。この中間に『こゝろ』が大正三（一九一四）年に書かれたのであるが、以下の推定を行うことによって、漱石が『座談』を読んだ時期をまさに「明治の終わり」である明治四十五（一九二二）年を中心とした二年間に限定することができる。そのために私が注目するのは『座談』の中で清沢が真宗大学の前途に非常に期待をかけていたことが述べられる以下の箇所である。

『（清沢）先生嘗て真宗大學を論じて曰く。この大學は世界第一の仏敎大學たらしめざる可からず。他日欧米より仏敎を學ぶ人がために日本に留學するものあらば、必ず先づ真宗大學に来るべし。されど、第一に留學に来るものは、印度、暹羅、安南諸國の人にして、欧米の諸士漸く之に次がん。（略）支那、日本、文明の隆運に向ふ時、わが大學は仏敎中心の大學たるべきなり。（略）爾等今より實力を養ひ、大いに他日の用に資せざる可からず。印度暹羅よりの留學は、最早や二十年を出でざるべし。』

このように『座談』では清沢が真宗大学の前途に大いに期待を抱いていたことが挙げられている。この他にも『座談』中では清沢が現在から見て（恐らく当時でも）、過剰とも言える期待を真宗大学に寄せているのがうかがわれる。しかしその真宗大学の学校騒動は明治四十四年十一月に京都再移転という形で決着したのは既に見た。これは改革派の敗北であり、その後改革

派の勢力がしばらく持ち直すことがなかったことを考えると、明らかに清沢の期待が打ち砕かれたときであった。

【上限の推定】

そこでここでは「漱石が清沢に強い共感を寄せていた」という前提のもとに、上限の時期として、漱石が真宗大学再移転「後」に『座談』を読んだという推定を試みる。「漱石が清沢に強い共感を寄せていた」という前提は第三章で論証する。

漱石が今手元で読んでいる『座談』の中で、亡き清沢は高い「理想」を掲げて真宗大学への期待を表明している。しかし「現実」には真宗大学再移転という形で清沢の真宗大学への期待は打ち砕かれた。「漱石が清沢に強い共感を寄せていた」としたら、この「理想と現実の間」(41)の相違を目の前にして、なにかしらやりきれない空虚さを感じずにはいられない。清沢満之は草創期の東京大学で最初に近代的教育を受けた人物として、およそ近代とは正反対の性質を持つ仏教教団の近代化改革に取り組んだ。清沢は自らの近代化改革の総決算として真宗大学に期待を寄せていた。その清沢の近代化改革は「明治の終わり」の時期に保守派による勝利の下にいえたのである。明治天皇崩御・乃木大将殉死は真宗大学の再移転から一年も経ずして起こった。明治天皇崩御・乃木大将殉死が漱石に「明治の終わり」を感じさせたのはしばしば指摘されることである。「漱石が清沢に強い共感を寄せていた」という前提が成り立てば、清沢の遺志の破綻とも言える真宗大学の京都再移転「後」に漱石は『座談』を読み、「現実と理想の衝突」(53)を感じ、乃木大将の殉死とは別の、もう一つの「明治の終わり」を象徴するものとして強い印象を受けたと言い得る。

【下限の推定】

次に下限の時期を推定する。それは講演『模倣と独立』との前後関係から推定できる。本章第一節講演『模倣と独立』の中で、漱石が真宗大学の学校騒動と乃木大将の殉死を「成功」というキーワードで並列してとらえているのを見た。先程上限を推定するときに検討したように、漱石は『座談』を読んで真宗大学の学校騒動の結末(現実)と清沢の真宗大学への強い期待(理想)との落差から「現実と理想の衝突」(53)を感じた。これは『こころ』を描こうとした強い動機になったはずである。つまり『座談』を読むことで漱石は真宗大学の学校騒動から乃木大将の殉死事件とは別の、もう一つの「明治の終わり」を感じた。そして『模倣と独立』の中で、漱石は真宗大学の「学校騒動」と「乃木大将の殉死事件」を並列させて述べている。そのほかにも『模倣と独立』の多くの表現・構造が『こころ』と関連を持っていることから、漱石が『模倣と独立』を行ったときには、既に『こ

ろ』の原構想ができあがっていたことが推測される。つまり漱石が『座談』を読んだ時期の下限を『模倣と独立』の前に置くことができる。

A…真宗大学の京都再移転（明治四十四（一九二一）年十一月）

B…乃木大将の殉死（大正元（一九一二年九月）「漱石が『座談』を読んだと推測される時期」

講演『模倣と独立』（大正二（一九一三年十二月）

（学校騒動（A）と乃木大将の殉死（B）とを「成功」という共通項でとらえている。）

もう一度、以上の推定を元に漱石が『座談』を読んだ時期を整理すると、明治四十四（一九二一）年十月の真宗大学再移転後から大正二（一九一三年十二月）の講演『模倣と独立』の前である。つまり「明治の終わり」である明治四十五／大正元（一九二二年）を中心とする二年の間に限定されてくる。恐らくはまさに明治天皇が崩御し、乃木大将が殉死した頃に漱石は『座談』を読んだのではないか。真宗大学再移転事件はそれ自体としては漱石に大した感化を及ぼさなかったとしても、漱石が『座談』を読んだ時期が偶然にも乃木大将の殉死事件などと一致することによって、漱石にもう一つの「明治の終わり」をより強く感じさせたはずである。

第一章 まとめ

以上、『こゝろ』以外の漱石自身の資料（第一節 講演『模倣と独立』、第二節 漱石書簡、第三節 漱石所蔵『清沢先生信仰座談』）を用いて、真宗大学の学校騒動を軸に漱石の『こゝろ』構想期について見て来た。ここではそれらを左図にまとめる。

年代

明治三十六年六月

清沢満之没

明治三十七年三月

『清沢先生信仰座談』初版刊行

明治四十年九月

漱石 真宗大学の教員に戸川秋骨を推薦(書簡八三二～八三四)

明治四十一年八月

漱石書簡九七九に「真宗大学」の字が見られる

明治四十三年

漱石所蔵『清沢先生信仰座談』刊行年

Ⅰ：『実在の事件』

明治四十四年十月

真宗大学の京都再移転・・・AⅠ

明治四十五年七／九月

明治天皇の崩御／乃木大将の殉死・・・BⅠ

Ⅱ：『模倣と独立』

大正二年十二月

学校騒動についての言及・・・AⅡ

乃木大将の殉死についての言及・・・BⅡ

Ⅲ：『こゝろ』

大正三年四月～

Kの自殺・・・AⅢ

八月

先生の自殺・・・BⅢ

大正五年十二月

漱石没

AⅠ(真宗大学の京都再移転)・BⅠ(乃木大将の殉死)は実際に起きた事件である。BⅠはBⅡ(乃木大将の殉死についての言及)とBⅢ(先生の自殺)の素材となっているように漱石は強い関心を抱いていた。またAⅠは第二節の漱石書簡で見つたように、漱石自身がかつて知人(戸川秋骨)の就職を周旋しようとしたことのある大学だけに、その移転事件に何らかの関心を抱いていたと推測される。その推測はAⅡで言及されていることから確認される。

Ⅱ『模倣と独立』とⅢ『こゝろ』は漱石自身からの資料である。第一節で講演『模倣と独立』の中のAⅡ(学校騒動につい

いままで示し得なかったのはAⅠ・AⅡとAⅢとのつながりである。現段階では真宗大学の学校騒動とKの自殺とのつながりは分かりにくい。それをつなぐためには真宗大学の学校騒動と清沢満之との密接な関わり、そして清沢満之の失敗を象徴するものとしてKの自殺が描かれたかどうかが問題となる。

事実、漱石は清沢満之の失敗を象徴するものとしてKの自殺を描いたと考えられるが、その論証のために第二章「清沢満之の生涯」では真宗大学の学校騒動には清沢満之という人物の性格・人生そのものが象徴されているのを見る。清沢満之とKの比較は第三章「Kiyozawa」で行うが、そのためにもまず清沢満之の生涯を述べる必要がある。

以下、連載予定である。

第二章 清沢満之の生涯

『駒澤大学佛教学部紀要』第七十三号(予定)

第三章 Kiyozawa

『駒澤大学仏教文学研究』第十八号(予定)

第四章 「こ、ろ」解釈

『駒澤大学佛教学部論集』第四十六号(予定) 最終号に注をまとめて付す予定である。

本論文は二〇〇〇年に筆者が当時東京大学文学部インド哲学仏教学研究室に所属していた際に末本文美士教授(現・国際日本文化研究センター教授)に提出した原稿を元に内容はほぼ変えず、題を改め、様式を調えたものである。本論文の一部要約として「近代日本の《光》と《影》：夏目漱石と清沢満之」『文学』(二〇〇一年三・四月号、岩波書店)に掲載している。

(本稿は平成二十六年日本学術振興会科学研究費(若手B・課題番号25870725)による研究成果の一部である)